

し記憶違いがあるようだ。それはともかく、病魔に犯されたことに加え、高等学校の語学教師の地位に満足出来なかったことに彼の大きな不幸があった。

熊本薬専教授 上田茂次郎



上田茂次郎

上田茂次郎（うえだ・もじろう）は、熊本大学薬学部保存されている履歴書によると、1870年（明治3）3月18日、熊本市坪井に生まれた。父上田新平は旧細川藩士。最初熊本県八代郡植柳小学校に学び、明治14年3月同校下等科を卒業すると、直ちに熊本市坪井町の壺川小学校に転校、3年間高等科修業。同17年4月同校高等科を卒業後、済々黌に入学、皇漢学、数学を2年間修めた。その頃同黌に普通科が設置されたので更にそこで2年間修業したが、その際ドイツ語も学んだのではないかと思う。やはり当時そこでドイツ語学んだ人に後年の外交官上田仙太郎、新聞人鳥居素川などがいた。明治22年上京、独逸学協会学校に入学、3年間高等中学程度の普通学を修めた。注目されるのは、そこを了えると同校内の専修科に進み3年間学んでいることだ。『独逸学協会学校五十年史』（昭和8年）に「専修科は専ら法律経済の学を授くる所であったが、是亦独乙人の教官之を担当し、独語を以て講義した。（中略）当時の機運が大に独乙の制度を収容せんとする時代であったから、先づ独乙の行政機構立法制度などを熟知する人物を養成せんとする目的に出でたるもので、行政官や司法官の試補を造るの心組であったのである。然して此当時は帝国大学にも、まだ独法科の設置なき時代で、寧ろ我校の施設で刺激せられ、後には独法科の設置を見るに至ったものである」とある。明治21年に第一回卒業生を出し、上田茂次郎もその一人であった第八回生は、すなわち明治28年の卒業で、前後10年間に総数165人の卒業生を世に送った。彼らの中には枢密顧問官有松英義、司法大臣の小山松吉、鴻池銀行頭取の加藤晴比古など多くの著名人がおり、上田のように独語教師となった人に武内大造（東京外語）、中村健一郎（三高）、足立謙吉（六高）などがいた。

専修科卒業後、帰熊し私立の熊本医学校と熊本薬学校の独語の嘱託教師となった。だがそれは2年で辞め、五高記念館所蔵の履歴書によると、その後九州鉄道株式会社に勤め、次いで明治32年3月には「東京府荏原郡大井村後藤合資会社ニ入社外国品購買係ニ従事」した。だがサラリーマンは性に合わなかったのか、明治33年9月に五高の嘱託教員になった。それを1年で依願退職したのは恐らく月報酬金35円に不満だったからではないか。熊本大学薬学部所蔵の履歴書によると、明治34年9月、上田は北海道の旭川衛戍地連合教育会の将校語学教官として招かれ、再び熊本を離れた。明治37年8月に日露戦争の勃発のため動員令が下され旭川連合教育会は閉会したので、彼は今度は陸軍士官学校の図書係主任を命じられた。そして1905年（明治

38) 9月私立熊本医学専門学校助教授に任命され漸く生活が安定した。それ以前は彼の遍歴時代と言えよう。私立熊本医学校が私立熊本医学専門学校として医学界に新しくスタートを切ったのは前年4月。谷口長雄校長は教授陣の充実をはかり、独語専任の教師として、以前熊本医学校設立当時一時勤めた、旧知の上田に白羽の矢を立てたのであった。彼は以後ずっと熊本にあってドイツ語教育に携わることになる。私立の熊本医専は大正10年県立に移管され、熊本県立医学専門学校となり、さらに翌年昇格し熊本医科大学と改称された。彼はその予科教授に就任した。だが3年後1923年(大正14)9月熊本薬学専門学校(現・熊大薬学部)教授に任命された。そして1941年(昭和16)2月28日を以て依願退職するまでその地位にあった。亡くなったのは日本の敗戦が濃くなった昭和20年3月22日である。墓は熊本市池田3丁目162番地の富尾墓地上の田家墓地にある。戒名「積善院殿植譽浄本居士」。上田家の菩提寺は熊本市細工町3丁目34番地の阿弥陀寺。

上田には著書や論文は無かったようだ。専ら教室でドイツ語を講義することに終始した人だった。だが語学教師の場合、その功績において著書の無い人は必ずしも著書のある人に劣らない。人となりについて長男の上田新氏(長崎市在住)は筆者宛の私信の中で次のように述べている。

「天性明るい性格で比較的楽天的であった印象があります。声が大きく哄笑するのが印象的でした。又諧謔を飛ばしては家中の者を笑わしていました。家庭にあっての父は正に慈父そのもので、子に対しても寛大でした。頑固といった処がなく、何でも自由に話が出来る人柄でした。幼時父が話してくれたグリムやアンデルセンの童話が尚耳に残っているような気がします。」

また「本当に父は経済的には苦しんでいました。父は二男でしたが他の男兄弟が死亡した為に没落士族の無一文の家を家督相続し、祖母及び寡婦となった伯母を引き取り子供五人を養育し、…(中略)母が屢々質屋通いをしていたことを子供心に知っています」と語り、家計が苦しかったことを告白している。それでも茂次郎は謡曲(喜多流)を嗜み、子供を金峰山の散策や、江津湖の魚釣りに連れ出すなど心の余裕を失なわなかったという。

教壇上の上田については資料がなく紹介できないが、「ドイツ語のモーンヤン先生」と呼ばれて学生たちに親しまれた。学生たちの面倒もよく見、卒業後に上田宅を訪れる者も多かったようだ。

明治以来、昭和前期まで熊本に於けるドイツ語教育の中心は云うまでもなく第五高等学校であった。そこでは教師の数も多く、まことに多士濟々であった。しかし専門学校の果たした役割も忘れてはならない。その際二人の教師の存在が大きい。一人が熊本医専・医科大学教授の魚住衛^{まもろ}であり、もう一人が今回取り上げた熊本薬専教授の上田茂次郎であった。

佐賀好生館々長 大黒安三郎と和独辞典

大黒安三郎(おおぐろ・やすさぶろう)は1870年(明治3)9月18日、岡山県真庭群勝山町に生まれた。明治28年第一高等学校三部(医科)を卒業、東京帝国大学医科大学に進んだ。明治33年11月大学卒業後、同年12月より34年12月までベルツ内科に入り、内科学を専攻。1902年